

ひょうごJCC

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

77

2012. 9. 28

兵庫JCCは、生協、JA（農協）、JF（漁協）、JForest（森林組合）等の兵庫県内の協同組合運動相互の連絡提携、共通課題の実行及び全国、海外の協同組合運動との連携をはかることを目的に、1984年7月7日に設立されました。「人とひとの心がふれあう、暮らしよい兵庫をめざしてー協同が息づくまちづくりー」を『基本理念』として、協同組合の「共通行動目標」の実践に取り組んでいます。

1. 協同組合活動スナップ 1
2. 2012国際協同組合年 第90回国際協同組合デー
兵庫県記念大会を開催 2~3
3. 講演《海と共に生きる～震災復興と「森は海の恋人」運動～》
牡蠣の森を慕う会 畠山 重篤 4~5

Contents

4. 今協同組合ではー各協同組合からの報告ー
 - 生協/JA（農協） 6
 - JF（漁協）/JForest（森林組合） 7
5. 協同組合運動に生きる
「漁師と漁業者」
JF兵庫漁連 専務理事 山口 徹夫 8

●●● 協同組合活動スナップ ●●●

兵協連ピースアクション2012



△ 生協

今年で4回目となる「広島被爆ピアノ平和コンサート」を8月10日（金）に開催。約200人の参加者が平和の音色に包まれました。

姫路城を稲で描こう/ひめじ田園アート



△ JA（農協）

JA兵庫西や地元の企業団体で構成する実行委員会は、6月17、18日に「ひめじ田園アート」の御田植え祭を開催しました。「ひめじ田園アート」は、5年目の今年が最後の開催になり、10月には収穫祭が行われます。

親子で干しダコづくりに挑戦!



△ JF（漁協）

ひょうごのお魚ファンクラブ「シートクラブ」で夏休みの親子イベントを開催! 干しダコをつくり、出来上がった干しダコを使ってタコ飯づくりをしました。

生産現場で活躍/高性能林業機械「ハーベスタ」



△ JForest（森林組合）

木材の伐採、枝払い、玉切り（丸太を一定の長さに切りそろえること）を一貫して行える高性能林業機械の「ハーベスタ」が木材生産現場で大活躍しています。

●編集発行

兵庫県協同組合連絡協議会（兵庫JCC）
Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives
生協・JA（農協）・JF（漁協）・JForest（森林組合）

●兵庫JCC事務局

兵庫県生活協同組合連合会 TEL (078)391-8634
兵庫県農業協同組合中央会 TEL (078)333-5896
兵庫県漁業協同組合連合会 TEL (078)940-8013
兵庫県森林組合連合会 TEL (078)341-5082

2012国際協同組合年 第90回 国際協同組合デー・兵庫県記念大会を開催



兵庫県協同組合連絡協議会（兵庫JCC）は7月6日、神戸市立東灘区民センター・うはらホールで「協同の力で未来を拓く」をテーマに、「2012国際協同組合年 第90回国際協同組合デー兵庫県記念大会」を開催しました。

国際協同組合デーは、全世界の協同組合員が心をつなげて協同組合運動の発展を祝い、平和とより良い生活を築くために運動の前進を行う日です。県内から、JA、漁協（JF）、森林組合、生協の組合員や役員、一般参加者など、約550人が参加しました。

第1部では、兵庫県生活協同組合連合会の新保雅子理事の司会で、4団体を代表して兵庫県漁業協同組合



連合会の山田隆義代表理事会長によるあいさつの後、兵庫六甲JA女性協議会の中西和子会長が、「2012年は国連が定めた国際協同組合年。今こそ協同組合の原点に立ち返り、身の回りに協同の関係をづくり出すことはもとより、『食の安全・安心』や『環境の保全』にかかる取り組みをさらに前進させる」と兵庫JCC宣言を朗読し、満場一致で採択されました。

第2部では、牡蠣の森を慕う会の畠山重篤代表が、「海と共に生きる～震災復興と森は海の恋人運動～」と題して記念講演を行いました。畠山氏は、「森と川と海はつながっている。豊かな海をつくるには、上流の森や川の栄養や、その周辺に住む人間の心が必要である」と強調され、会場からは惜しみない拍手が贈られました。

なお記念大会に先立ち、当日同会場で、第29回兵庫JCC委員会が開催され、2012年度の事業計画・予算等が審議されました。



第90回 国際協同組合デー兵庫JCC宣言

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震、津波そして原子力発電所の事故が重なった未曾有の災害として、被災地に壊滅的な被害をもたらしました。一方、東日本大震災の被災地に寄せられた支援の輪は、国内はもとより海外にまで広がり、改めて協同組合の基本理念である「相互扶助」の大切さを痛感しました。

さて、2012年は国連が定めた国際協同組合年（IYC）にあたります。これは、協同組合がこれまで社会経済の発展や世界の食料安全保障、金融危機といった面で果たしてきた役割を国連が高く評価し、各国の協同組合がこれらの問題にいつでも積極的に取り組むことに期待し制定されたものです。こうした評価は、協同組合が地域社会に根ざし、バブル経済とその崩壊の影響を最小限に抑え、社会経済システムに安定性をもたらしたことに由来します。

また、11月にはICA-AP（アジア太平洋）地域総会が、協同組合運動の父である賀川豊彦のゆかりの地であるここ神戸で開催され、そして、



ひょうごJCC宣言を読み上げる兵庫六甲JA女性協議会の中西会長

来る2013年は兵庫JCC設立30周年を迎えます。

このような中、私たち協同組合は、IYCのスローガンである「協同組合がよりよい社会を築きます」の精神を高く掲げ、協同組合の社会的認知度を高め、協同組合と地域社会の発展につなげていかなければなりません。

本日、2012国際協同組合年第90回国際協同組合デー・兵庫県記念大会の開催にあたり、生協、農協、漁協、森林組合など、兵庫県内の協同組合に集う私たちは、今こそ協同組合の原点に立ち返し、私たちの身の回りから協同の関係をつくりだ

すことはもとより、「食の安全・安心」や「環境の保全」にかかる取り組みをさらに前進させるとともに、「協同の力で未来を拓く」をスローガンに、人と人との心がふれあう、暮らしよい兵庫と協同組合の発展をめざし、一層努力していくことをここに宣言します。

2012年7月6日

2012国際協同組合年
第90回国際協同組合デー兵庫県記念大会

参加者の感想

講演前は、国連が選ぶ「森の英雄（フォレスト・ヒーローズ）」に水産関係者が受賞したと聞いて不思議に思いました。しかし、島山氏の「海に生きる漁師が森の英雄として表彰されることこそ、海と森がつながっていることを世界に発信する絶好のチャンス」という言葉に森林組合の一員として感銘を受けました。山、川、海、人がつながるように、兵庫JCCの4団体が一体となって協同組合運動を実践し、よりよい社会づくりに貢献したいと思います。

「森は海の恋人運動」を長年推進されている島山氏の、印象的な言葉。『海をつくるには、山に木を植えなければならぬ。海にも木、つまり海草を植えなければならぬ。そして、人の「心」にも木を植えなければならぬ。』水産関係者として、これからは人の「心」にも木を植えながら、豊かな海づくり活動を推進していきたいと思います。



2012国際協同組合年
第90回国際協同組合デー兵庫県記念大会 2012年7月6日

講演 海と共に生きる ～震災復興と「森は海の恋人」運動～

講師 牡蠣の森を慕う会 畠山重篤 代表

なぜ、海に生きる漁師が山に木を植えるのですか？

私は、宮城県気仙沼湾で牡蠣の養殖業を営んでいます。牡蠣の養殖は父の代からの家業で、65年になります。私は、24年前から気仙沼湾に注ぐ大川の上流域の室根山に広葉樹を植える、植林活動を行ってきました。「森は海の恋人」運動です。「牡蠣の養殖をしている漁師が、なぜ、山に木を植えるのですか？」と聞かれるのですが、私たち漁師は、山と川と海には密接な関係があることを経験的に知っているのです。

牡蠣や魚など海の生物は海水だけで生きているわけではありません。海の生物は、海水に含まれるプランクトンや海藻から主な栄養を摂って生きています。プランクトンや海藻類は、木の栄養素となる窒素、リン、ケイ素などを摂取して成長します。山の木が必要としている栄養素を海の生き物も必要としているのです。

雨が山に降り、山の栄養素が川を伝って海にたどり着くことで海中の微生物が育ち、その微生物を魚介類が食べて大きくなります。魚や牡蠣が育つには豊かな森が必要なのです。この自然の摂理を守るために、私たちは山に木を植えているのです。

「相互扶助」の精神、 つながり、補い合うことで 豊かになる山、川、海、人。

私たちの気仙沼湾の漁場も、昨年の東日本大震災で大きな被害を受けました。あの1000年に一度といわれる大津波です。養殖場、漁船はもちろん民家も流され、気仙沼だけでも約1000名の人が亡くなり、行方不明者は約300名とされています。平成元年からの植林運動で豊かな海が蘇り、この運動をもっと広げようと考えていた矢先のことだっただけに、意気消沈しました。民家も漁船も牡蠣の養殖場もなくなり、海辺にたくさんいた小魚さえ見えなくなっていたのですから。

ところが震災から一カ月経ったある日、孫が「じいちゃん、海に魚がいる！」と言うではありませんか。海まで行って見ると、そこにはたくさんの小魚が戻って来ました。海の再生を目の当たりにし、心が震えました。こうしてはられないと思い、昨年5月から植林活動を再開したのです。

この活動が目ざされ、私は、国連が森林の保護に取り組む人に贈る「森の英雄（フォレストヒーローズ）」に選ばれました。私はアジア代表として、今年、ニューヨークの国連事務局に行き、金メダルと表彰状をいただきました。海に生きる漁師が「森の英雄」として表彰されることこそ、海と森がつながっていることを世界に発信する絶好のチャンスだとうれしく思いました。

海を豊かにするためには山を豊かにする必要があります。でも、それだけではありません。山と海をつなぐ川を豊かにしなければならないのです。そのためには、川の流域に暮らす人の心が豊かでなければなりません。山に木をたくさん植えても、川の流域に暮らす人が工場排水や生活排水をどんどん川に流したらどうなりますか？山、川、海、人がつながって互いに助け合い、補い合ってはじめて本当に良い結果が出るのです。

本日、生活協同組合、農業協同組合、漁業協同組合、森林組合が「協同の力で未来を拓く」というテーマの下に一堂に会しておられます。これこそ理想の姿だと思いました。協同組合の基本理念「相互扶助」の精神が未来を拓くのです。

京都大学で教鞭を執り 次世代を担う若者を教育。

私が国連の「森の英雄」に選ばれたことを語る上で、忘れてはならないことがあります。それは京都大学の存在です。約10年前、京都大学の林学、河川生態学、水産学を研究する3名の教授が、遠路はるばる私の家を訪ねて来られました。理由は「森林からどのような成分が川を伝って海に流れ、魚たちの栄養になっているのかを研究したい」

とのことでした。このテーマが山と海と川の3つの学問分野に関連していることはわかっていても、すべてを研究している学者はいないというのです。そこで京都大学は、林学、農学、水産学、理学を体系的に学ぶための「フィールド科学教育研究センター」を立ち上げ、それぞれ異なる分野の研究者が相互に関わり合いながら研究を行うことになったそうです。

学問の世界で横のつながりを持って研究するというのは画期的なことだそうで、新しい学問分野に取り組むにあたり、総合的にこの分野に携わっている人として私に白羽の矢が立ったわけです。「漁師なのに山に木を植えている人がいる」と。

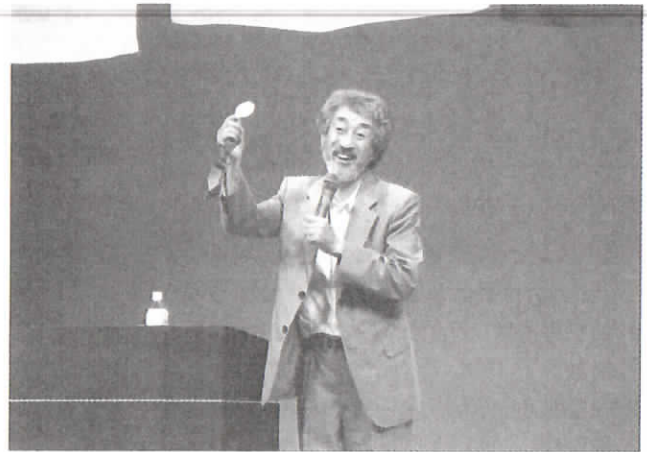
同研究センター立ち上げのシンポジウムで講演をしただけでなく、「フィールド科学教育研究センター社会連携教授」の辞令を受けて、京都大学で教鞭も執っています。若い人たちに「海、山、川、人」のつながりについて教育することは、次世代へ思いを託すことですから、今、木を植えることと同じように大切なことなのです。

■ 環境に良いことを少しずつ。 小さな積み重ねで未来を変える。

実は、教育の大切さは京都大学で教鞭を執る以前から強く感じていました。そのため、植林を始めて間もない平成2年、気仙沼湾に注ぐ大川の流域に暮らす子どもたちを海に招いて「山と海はつながっている」ことを体験的に学ぶ教育活動を始めました。

上流域の山に住んでいる子どもたちが森林組合のバスに乗って気仙沼湾にやって来て、船に乗って牡蠣の養殖イカダまで行きます。イカダで牡蠣を見せて、「牡蠣は何を食べると思う？」とクイズを出したりします。「牡蠣は海水の中の植物プランクトンを食べるんだよ」と言って、コップに植物プランクトンを溜めて見せます。茶色くて、よく見るとウジャウジャと動いている。「飲んでみて」と薦めると、勇気のある子が飲んで「あれ？キュウリの味がする」と驚きます。海の微生物なのに野菜の味がするから驚くのです。船の上から、遙か遠くにそびえる山を指さして「プランクトンのエサになる養分は、あの山から川を伝って海に注いでいるんだよ」というと、子どもたちは目をキラキラ輝かせて耳を傾けます。そして「山と海は川でつながっているんだな。山の木を大切に、川の水を汚さないようにしないと海が大変なことになる」と気づきます。

子どもたちは家に帰って、農業を営むお父さんに「少しでもいいから農業を減らしてください」と言い、お母さんに「台所の洗剤、洗濯用洗剤を少しだけでいいから減らしてください」とお願いするようになるのです。そして自分もシャンプーの量を減らす。環境によくない物を、皆が



フォレスト・ヒーローズのメダルを掲げる畠山講師

少しずつ減らすだけで良いと思います。それだけで何かが変わると思います。

■ 稚魚放流ではなく 魚が戻る豊かな環境にすることが大切。

三陸沖は世界の三大漁場といわれます。日本で水揚げされる魚の半分は三陸沖で獲れます。魚のエサになるプランクトンが大量に生息する水域だから魚が集まるのですが、長い間、なぜ三陸沖にプランクトンが大量に生息するのかがわからなかったのです。この謎が2年前に解明されました。ロシアと中国の国境を流れるアムール川の流域にある巨大な森林の養分が、アムール川からアムール湾に注ぎ、さらに海流に乗って三陸沖に届いているというのです。アムール川流域にある森林は、日本の国土の5倍以上の大森林です。この巨大な森林の豊富な養分が、三陸沖を豊かな漁場にしているのです。日本の国土の中だけでなく、世界も山、川、海でつながっているのです。

魚が少なくなったからといって、稚魚を放流してもエサとなるプランクトンがいないと育ちません。森に木を植え、川の底をコンクリートで固めずに、できるだけ自然な姿に戻すことが大切なのです。

講師／畠山 重篤氏 (はたけやま しげあつ)

1943年 中国上海生まれ。県立気仙沼水産高校卒業後、家業の牡蠣養殖業を継ぐ。

1989年より、漁民による広葉樹の植林活動「森は海の恋人」運動を推進。

2003年、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰。

2004年、宮沢賢治イーハトーブ賞受賞。

2012年、国連が森林の保護に取り組む人に贈る

「森の英雄 (フォレスト・ヒーローズ)」に選ばれた。

著書「カキじいさんとしげぼう」は、英訳され海外で多数愛読されている。

牡蠣の森を慕う会代表

NPO法人「森は海の恋人」代表

京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授

今 協同組合では — 各協同組合からの報告

生協から

第62回通常総会を開催

6月27日(水)、兵庫県民会館で兵庫県生活協同組合連合会第62回通常総会を開催しました。2012年度活動計画のなかで「協同組合間協同の前進をはかります」という課題を掲げています。その内容は次のとおりです。

1. 兵庫JCC（兵庫県協同組合連絡協議会）の充実をはかります。
2. 国際協同組合デー・兵庫県記念大会などを農協、漁協、森林組合といっしょに開催します。
3. 機関紙『ひょうごJCC』を定期発行します。
4. 地域やくらしに貢献する取り組みについて協議、連携します。
5. 2012国際協同組合年の行事を具体化、実施します。

2012年度兵庫県生協大会にご参加を

2012年10月9日(火) 13時～16時30分、兵庫県民会館で開催。第1部は記念式典、第2部は日本生協連政策企画部の小熊竹彦部長による講演「一緒に考える、これからの環境、エネルギーのあり方と生協の役割」。また、骨密度・体脂肪・血圧測定などの健康チェックや東北地方の特産物やコープ菓子パンの販売、2012国際協同組合年紹介パネルの展示も行います。



昨年の健康チェック



昨年の販売風景

参加のお問い合わせは、078-391-8634 兵協連まで。

JA(農協)から

こうべ地域のたべもの祭り開催

こうべ地域のたべもの祭り実行委員会（主催：JA兵庫六甲、神戸市西区の生産者組織・関係機関など）は9月2日、神戸ワイナリー（農業公園）で「第3回こうべ地域のたべもの祭り」を開催しました。イベントは、農とたべものを核とした地域のつながりをつくり深めていくことを目的とした「地域たべものコミュニティづくり」の一環。



オリジナル寿司を選ぶ来場者

当日、イベントの目玉として市内の有名ホテルのシェフ4人が西区の野菜と果物、米を使ったオリジナル寿司全16種類を考案し、限定1万個を完売。西区の果物と野菜をふんだんに使った1千食のフルーツパンチも完売しました。購入者からは「とてもおいしい」「地元の野菜と果物を使っていて良いですね」と声が聞かれました。

ほかにも「親子で挑戦！梨の皮むき大会」、梨、ブドウなどの果樹団地を巡るバスツアーなどのイベントや、地元農家による米粉を使った直径1メートルの巨大お好み焼き、イチジクなどの果物の即売会などさまざまなお店が並び、延べ8000人が訪れた盛大なイベントとなりました。

JF(漁協)から

～垂水・明石でコープマリンスクールを開催～

コープこうべ・JF神戸市・JF兵庫漁連が協同組合間提携事業として開催している「コープマリンスクール」を、本年も7月26・27日に垂水コースとしてJF神戸市で、8月3・4日にJF兵庫漁連シートクラブコースとしてJF兵庫漁連（兵庫県水産会館・明石市）にて開催いたしました。

垂水コースでは、参加者はタコ・魚のつかみ取りやタコの塩もみ、また、セリ市見学など、漁協ならではの特別な体験を楽しみました。また、兵庫の漁業についての勉強や、神戸市立栽培漁業センターの協力のもと、ヒラメの稚魚の放流を行い、魚を捕って食べるばかりではなく、魚を増やす大切さも学びました。



続いて開催したシートクラブコースでは、参加者は親子で干しダコ作りと魚の三枚おろしに挑戦した後、自らが調理したアジのソテーと、旬の明石ダコを中心とした昼食を楽しみました。午後からは、兵庫の漁業についてしっかりと学び、また、チリメンモンスター探しで盛り上がりました。

初めは恐る恐る魚にふれていた子どもたちも、保護者の協力を得ながらだんだんと慣れ、目を輝かせながら魚にふれていました。

マリンスクール後のアンケートでは、魚のつかみどりやタコの塩もみ、魚の三枚おろしなど、魚とふれあった体験を子ども・大人問わず楽しんでいただけたようです。

JF兵庫漁連シートクラブは兵庫のお魚ファンがもっともっと増えるように、これからも活動していこうと思っています。参加者のみなさんには、この経験をご家庭でも生かして、お魚を食べる習慣づくりをしていただけるように願います。

ひょうごのお魚ファンクラブ
SEAT CLUB
<http://www.seat-sakana.net>

JForest(森林組合)から

「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」がスタート

平成24年7月1日から「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」が始まりました。

この制度は、太陽光・風力・水力・地熱・バイオマスなど、再生可能なエネルギーによって発電された電気を、電力会社に一定の期間・価格で買い取ることを義務付けたもので、ドイツやスペインなどでも導入されている制度です。



バイオマスエネルギーには、林内で放置されている未利用間伐材や、製材過程で発生する木くず等の木質バイオマスも含まれており、それらの資源が有効活用される事になります。

一般的に、送電出力5,000kWの木質バイオマス発電所では、一般住宅の約1万2千世帯の年間電力量を賄える発電能力があり、使用する木質燃料は年間約6万トンにもなると言われています。

林業を取り巻く状況は、木材需要の伸び悩みや円高による割安な輸入材の増加等により、今年に入り国産原木価格が

全国的に暴落するなど、大変厳しいものとなっています。

その様な中、発電用燃料という新たな需要が生まれることは、林業が活性化され森林整備の促進により、山地災害や地球温暖化の防止への貢献が期待されます。

また、木質バイオマス発電は、太陽光発電などとは違って、常に木質燃料を供給する必要があるため、山村地域にとっては雇用確保等の経済波及効果が期待されます。

今後、森林組合系統としては、木質燃料を効率的かつ安価に林内から収集・搬出し加工して利用する体制の構築に向けた取り組みを行っていく予定です。



協同組合運動 に生きる

漁師と漁業者

JF兵庫漁連 専務理事 山口 徹夫



漁業を生業なりわいとしている人々のことを最近「漁業者」と呼ぶことが多くなったが、個人的には「漁師」の方が好きである。

漁業者といわれることが多くなったのは、農林水産省などの文書で、「百姓」や「漁師」という言葉が差別用語のように解釈され使われなくなったのではないかと解釈されているためだろう。

漁協組織に身を置くようになって間もないころ、あの方からこんな話を聞いたことがある。

漁業を行うにはさまざまな知識が必要だ。まず、漁に出る前には天候のこと（気象学）を知らなければ、沖に出ても無駄足になるだけでなく、生命にかかわることもある。次に、海洋学の事を知らなければ、つまり海底地形や海流のことを無視しては、思い通りに釣り糸や網を入れることはできないし、水温や塩分濃度の変化に注意しておかなければ、どこに漁場が形成されるのかもわからない。最も大切なことは魚類の生態学である。例えば魚種によってどこで生まれ、何を食べ、どのように移動し、どのような場所をすみかにしているのか。そして、水温や塩分濃度あるいは潮流とどんな関係があるのかを知らなければ漁にならない。

さらには、獲った魚の鮮度保持法・価格情報そして漁船の操船術や漁具のメンテナンスなど何一つ欠けても漁業を生業とすることができない。

だから彼らのことを、漁業を行う先生、つまり尊敬の意味も込めて「漁師」と呼ぶんだ。と！

このことは、漁師さんに漁に連れて行ってもらうと

良く分かる。例えば明石海峡で一本釣りに同乗させていただいた時に、面白いように釣れるメバルを見ながら広い海面で何の印もない一点（ポイント）をぴたりと定めるのに驚いたが、聞いてみると船上から陸を見て、陸に複数の目印を定め、目印の交わる点で位置を知る「山立て」という方法でポイントを記憶しているという。

もちろん、沖に行く前に天候を読み、狙いの魚の釣れる潮を見て出漁するが、現場では強い潮の流れと水深を計算して糸を垂らし、餌を何にするのかなども重要な要素となる。また、タコツボ漁などでは長いロープに多くのタコツボを結んだものを海底に設置して、目印もないのにスマルという道具で海底のロープ先端を見事に引っかけるというが、これにも山立ての技術が使われているという。

このように漁師さん達は、経験に裏打ちされた技術を駆使し資源管理にも配慮しつつ漁業を続けている。漁業を取り巻く環境が、かつてないほど厳しい危機的な状況にあるが、同時に漁業にかかわらず、大自然を相手にする農林水産業においては、必用な時には力を合わせる事が必須であるため、自然発生的に協同組合的な考え方が醸成されやすい素地がある。

今年は国連の定めた国際協同組合年。

この機会に魚食という日本型の食文化を支え、海の環境を守る役割も併せ持つマイスター的な漁師が、漁師として生きていけるような体制づくりを、消費者の理解を得ながら進めるためにも、協同組合の真価を発揮できるよう運動に拍車をかける時期に来ている。